4年ぶりの北京旅行 は快適そのもの、しかも充実していた（後編）

為我井 輝忠

今回の北京旅行は４年振りであった。10月23日から11月５日までの２週間北京に滞在した。最初は天津にも行ってみたいと思ったが、北京で見たいところや訪ねたいところがあったので、北京のみとした。前半は気ままに一人で市内を歩き回った。それについては前編で記した通りである。後半は後から北京入りした“わんりい”の田井光枝、杣野一、高橋節子各氏と共に、長年の友人である周路氏の、30年に及ぶ芸術活動の回顧記念展のオープニングに出席し周氏との旧交を温めることが出来た。彼は20年前に日本へ来て、版画研修の為長期滞在していた折、東京都内や町田で展覧会を開いたことがあった。町田で開かれた展覧会を偶然見て彼と初めて会った。以来何度も会い、彼の帰国後、安徽省合肥に出掛けたり、陝西省の黄土高原へ彼と一緒に旅行をした。その後も彼との交友は続き、「老朋友」と言ってもよいほどである。

周路氏の回顧展は「黄色い大地」というタイトルが付けられ、長年陝西省陝北の黄土高原をフィールドとした写真と版画によるもので、両方合わせてその数およそ120点にも及ぶものである。会場は北京市朝陽区の炎黄芸術館で、会期は11月２日から６日まで開催された。

２日が開幕式であったが、周路氏はその前の晩に忙しい最中に我々を訪ねてホテルまで会いに来てくれた。10年振りの再会である。作品集２冊を持参され、プレゼントしてくれた。彼は以前に会った時と比べると、かなり恰幅もよくなり、人当たりもよくなってきたようである。ただ、相変わらず日本語の能力は全く同じである（ごめんなさい！）。娘さんも一緒に来られた。彼女とは小学生の時に安徽省合肥で２度会っているが、それから10数年を経て大学を卒業し、今では父親と同じように美術の仕事をしているという話であった。

開幕式では、多くの関係者が参加された。北京中央美術学院版画家夫妻、中国美術館副館長、炎黄芸術館館長、安徽財経大学美術大学美術学院長を始め友人や知人が祝辞を述べられた。“わんりぃ”の元代表・田井光枝氏も乞われて挨拶されたが、前日に急に頼まれて、長年使っていない中国語でのスピーチは荷が重いとの事で同行の‘わんりぃ’会員の高橋節子氏が通訳された。

展示作品の内、私は陝西省の黄土高原に住む農民たちの生活を撮った写真に興味を覚えた。私が彼と共に訪れた10数年前の黄河沿いに住む人々の生活が、今もほとんど変わらずに営まれていて、中国の大きな発展の陰で取り残されてしまったような印象を受けた。版画も全体的に陰影に富

ホテルで再会を喜ぶ（左から二人目が周路氏）

潘家園旧貨市場にて

中国風の南堂（天主教聖母会）の入口

南堂の正面

んだものが多く、心惹かれる作品ばかりであった。またこの黄土高原を訪れてみたいものである。周路氏は来年５月には日本に来るかも知れないとのことで、また再会できるならば嬉しい限りである。

今回一緒に参加された杣野氏に知り合いの李涛氏（中国国際図書貿易集団有限公司）を紹介くださった。私が潘家園旧貨市場へ行きたいと希望を述べると、杣野氏と共に案内してくださった。これまで何度か行ったことはあるが、土・日曜日は青空市場があるということで、正にこの日（4日）は土曜日のため、この市場を見て回ることが出来た。青空市場では主に書籍や古写真が売られていて、欲しいと思っていた書籍を２冊と数枚の写真を購入できた。写真は戦前のものばかりで、値段はかなりした。この種のものがたくさん売られていて、本当はもっと欲しかったが、今回はこれくらいにして、また次回に再度訪れることが出来ればと思った。

夜は李涛氏と彼の家族、杣野氏と共に夕食を共にした。奥さんと子供さんが来られて、楽しい一夜を過ごした。奥さんは日本に一度来たことがあるそうで、英語も話すことが出来る。息子は少学生だが、英語がかなり分かるようで、色々話をすることが出来きた。

北京ではもう一つの目的があった。それは前編でも述べたが、古い教会を見て回ることであった。北京には19世紀後半に建てられたカトリック教会がいくつもあり、今回、南堂（天守教聖母会）、東堂（王府井教会）、聖三額爾天主堂、中華聖公会教堂（プロテスタント）を見学した。南堂は北京最古の教会と言われ、1605年にイタリア人マテオ・リッチが建てた教会である。そのほかの教会も歴史のあるものばかりで、日曜日にこうした教会を訪ねると礼拝に訪れる人の数の多さには驚かされる。

最後に、前回タクシー乗車の際の料金のことを述べたが、北京滞在中に何人かの人に教えてもらったことがある。最近多くの人は路上でタクシーを捕まえず、スマートホンを利用して呼び出し、指定の場所に来てもらうシステムがほとんどだそうだ。道理で空車が走っているのにタクシーを捕まえるのが難しいのが分かった。ただ、来てもらった車はみなタクシーではなく、普通の乗用車であった。北京到着時に乗った車の料金に関しては、かなりぼられたような気がする。